

入る（その二）

昭和二十八年教祖七十年祭の御年柄に私は金光学院に入学することになりました。

私は学院に入学することに対して不承無承だったのです。なぜならば池田教会は次々と不幸なことばかりが続き、私は若者ながらに「信心するということは他の人々よりもおかげを頂いてのことであるはずだと、それがなんだ。かんじんかなめの教会がおかげらしいおかげも、よう頂いておらんではないか」と。

「初代の祖父が六十歳をすぎて亡くなりました時、父（四男）は十四歳でした。さらに二代の父が四十三歳でなくなりました時、私も同じく十四歳でありました。なぜこのように親子のバトンタッチがうまくいかないのか。池田教会の布教の上にとっても、四方家一族の上にとっても、これ以上不都合なことはないではないか」と。

一体全体神様はどうなっておるのか。信心とは何か。私は私なりに、二十二歳の若者なりに悩み苦しみました。

しかし、親戚の教会の先生や池田教会の信徒役員の方たちが、なにがなんでも私に学院へいって池田教会を継いでもらわないと池田教会はつぶれると申します。私はどうせつぶれか

かっているこの教会などつぶれてもかまわないといっていたのですが、ふと父のいっていたことを思い出したのです。

父も、本当は池田教会を継ぎたくなかったと申しておりました。父の長兄に東三郎さんという方がおられたのですが、二十歳を過ぎて亡くなられたので（次男・三男は若くして亡くなっておられます）四男の父にお鉢がまわってきたのです。

父は学問が好きで、文章を書いたり絵画に心を向けていた人なのです。その父が自己をすててお道のために池田教会を継いでくれたのです。私はそんな父の思いを大切に思い、私も父のあとを受け継がなければと決心したやさき、前教会長をつとめていた母（雪子）が急に亡くなりましたから、あわただしい中でなにぶんにも十分な勉強も用意も心の準備もできていないまま五月中旬学院入学ということになったのです。

入学式に引き続き修徳殿入殿が五日間ぐらいあってそれから学院の通常の授業にはいるのですが、この修徳殿入殿が大変だったのです。朝御祈念後に神習・朝食後にまた神習そして午後にもまた神習というぐあいには本部広前で学院生全員が神習させられたのです。神習というのは、お結界に御神勤なされている教主金光様（当時は三代様）に神ならわして頂くという願いのもとで一時間から二時間ぐらい正座するという修業なのです。私は学院へ入学する

まで正座を長時間することがありませんでしたので足が痛くて、もうたまったもんでなかったです。とうとう私は、二日目でしたか三日目でしたか忘れましたが、全員が本部広前へ神習に出かけるとき一人だけ押し入れにはいって休憩していたのです。あまりよい気分のもではなかったですが、全体行動からはなれて一人ぼんやり暗い押し入れのなかでさぼっている、なるほど私の足は助かるのですが、私の心は助からないことになるのです。全員が帰って来るまでの二時間あまりがずいぶんと長かったように思います。そしてその間色々と考えさせられたように思います。そんなことがあって、次の神習にはおわびの心でいっぱいでお広前へいかせて頂きました。お広前に座らせて頂きましたら、頭があがらずひれ伏したまま泣けて泣けて涙がとまらないのです。何が悲しいというのでもなく、何が有り難いというのでもないのですが、ただただ泣けてくるのです。泣いていたというよりも泣かされているたというのが実感です。これが御本部広前の徳というものでしょうか。この泣かされているあいだに私の心に何かが入ったように思います。

私は、この事以来心が決まり、自分自身が生まれ変わったように思います。その後学院生活も私なりにまじめにおかげ頂くことができ数日後にはタバコを吸うのも止め、それ以来吸っておりません。